



1. 出航の準備をする祖父・興一さん。漁の記録をノートにつけている。2. 前日に水揚げしたツブ貝を剥く三男・怜恩くん。3. 真っ暗な海に船の明かりが灯る。



### 真夜中の出航

午前2時、洋裕さん起床。すぐに次男と三男が起きてきて、せつせと防寒着を着込む。2時半、3人は2トントラックに乗り込んで出発した。途中コンビニに寄って各々おにぎりやサンドイッチを買って込む。激しく左右に曲がる山道を10分ほど行くと、真っ暗な港に着いた。ほどなくすると1台の軽トラックが滑るように乗り付け、腰の曲がった祖父・興一（よいち）さん（80）が現れる。船は風に揺られ、船着場との距離がふわふわと広がるが、「自分で来てみる、落ちたら助けてやっから」と言うだけで、洋裕さんは決して手を出さない。2人の息子たちはタイミングを見計らって自分で船に飛び乗った。出航を待つまでの間、三男は甲板でツブ貝を剥きはじめた。1カゴ剥くと500円のお駄賃がもらえるのだという。

3時26分、出航。船室の中で舵を握るのは祖父。「いつから漁師

「大きくなったら、お父さんと同じ仕事がしたい」。クリクリとした大きな目の男の子が言った。「ゴールデンウィークはお父さんについて行って船で遊ぶの？」と聞くと、「遊びじゃないよ。仕事の手伝いだよ」と、驚くほどはつきりとした口調で答えた。佐々木怜恩（れおん）くん、まだ5歳だ。

男の子ばかりの4人兄弟の夕飯時は騒がしい。突然取っ組み合いが始まり、だんだんヒートアップしていく。ゴンツという鈍い音のあと、間髪入れずにギヤーという泣き声でお母さんが間に入る。これが何度か繰り返される。夜8時、パジャマに着替えた次男・翔英くん（10）が「じゃあ俺、寝るから」と寝室に上がり、三男・怜恩くんも後に続く。明朝の漁に同行するためだ。グラスがすっきりと隠れてしまうほどの大きな手でビールを傾けながら、その様子を目尻いっぱい皺を寄せて見つめる父・佐々木洋裕（ひろやす）さん（47）が、今回の主役だ。

なんですか？」と聞くと、「生まれた時から」とニヤリと笑った。子どもたちは暖かい船室の奥に潜り込んで仮眠をとる。洋裕さんは、船の後ろ側で発泡スチロール箱を並べて次々と水を詰めていく。湾を出ると急に波が変わり、船が大きく揺れはじめた。水平線には遠くの船の明かりが2、3個見えるばかりだ。

3時59分。エンジンの回転数が落ち、パツと甲板が明るい光で照らされる。ようやく一つ目のポイントに着いた。洋裕さんは、無数のカゴがついた長いロープを水深130〜180mの海底に仕掛けて、カゴに入った魚やタコ、カニを獲る「カゴ漁」を行う。グワングワンと音を立てながら機械でロープを巻き上げること10分、最初のカゴが水面から顔を出した。洋裕さんはカゴを開けて中に入った魚や貝を手早く取り出し、空になったカゴを祖父に渡す。祖父は新しい餌をカゴに仕掛け、甲板に積み重ねていく。